

日本近世思想と円空仏

岩 崎 允 脩

昨年の初秋、岡部先生から、駒沢大学に来て哲学の話をしてみませんかという御趣旨の、お誘いをいただきました。その六月に『近世日本思想史序説』と題する上下二巻の著作をわたくしが新日本出版社から上梓いたしまして、幸い世の好評をいただきましたので、そのことを念頭にいれられ声を掛けてくださったのかも知れないと思いました。しかし、何といつても駒沢大学は仏教の著名な大学であり、お話しいたしますのに相応しいテーマがわたくしに見付かるかどうか、ためらいも大きかつたのですが、折角の御厚意に感謝して、お引受けすることにいたしました。

さて、今日のテーマですが、やはり、いま述べた拙著からテーマをさがすことにいたします。その上梓にあたって出版社がたいへん綺麗な広告刷を作つて広く配布してくださいました。皆さまのお手許にお渡ししてあると思いますので、それを開いていただくと、上下二巻の目次がかなり細く出てい

ます。近世思想史には重要な問題がたくさんありますので、今日は、そのなかから幾つかをとりあげることにいたします。また、この目次の左下には、補論として、I 「近世絵画の興隆とその思想」、II 「円空仏と山岳信仰」となっております。この補論から、II の円空をテーマの一つとしてとりあげたいと思います。円空は三井園城寺にぞくする遊行僧であり、駒沢大学のよつて立つ曹洞宗とは仏教思想を異にしますが、広く仏教ということで深い関わりがあろうか、と考えます。そこで今日は、まず全体として近世思想の歴史上の問題をいろいろわたくしとして考えて、そこから仏教の思想なりびに芸術の問題として円空に移ることといたしたいと存じます。

一 元禄という時代

——西鶴・芭蕉と円空との対比の視点

わたくしがこの著作で円空（一六三二—一九五年）をとりあげたのには理由があります。それに、補論1で江戸期の絵画、とくにその思想を論じましたので、それでは彫刻はどうかということもありましようが、もつと重要なことは、江戸期の思想文化の最初の大きな興隆をみせた時期として元禄時代があります。そして西鶴、芭蕉、近松らが輩出します。円空はかれらとほぼ同時代の空気を吸っています（円空は西鶴には十年、芭蕉には十二年、近松には二十一年、先立つて生まれています）。そこで、西鶴、芭蕉らの文学と円空仏といわば横に置いて対比してみるという視点をわたくしはこの著作で掲げました。

元禄時代をここではかなり広く考えております。もちろん狭いえば（また厳密にいえばそういうことでしょうが）、元禄という年号のあつた時代（一六八八—一七〇九年）となりましょう。また、綱吉の将軍であつた時期（一六八〇—一七〇九年）も考えることができましょう。しかし、より広く、一六五七年正月の明暦の大火灾（四百町を焼き尽くし十万余の死者を出したいわゆる振袖火事）から、一七一六年（享保元年）に吉宗が將軍職に就く前、つまり享保以前を、元禄

期とみることにいたしました。これは東京大学の史料編纂所におられた松島栄一先生のお説によるものです。明暦の大火灾によって江戸は大きく変わります。それまで江戸城を中心にして自然発生的に江戸は作られてきましたが、焼野原になつたあと大規模な都市計画がすすめられます。平和な時代がくるのだから威圧感を与える天守閣はなくす。寺なども、増上寺を除いて、まとめて遠くに移す。つまり、そのあたりを新たに江戸の町の外郭にするわけです。また大火の翌年（万治元年）、幕府直結の定火消役を設け、防火と非常警備にあたらせることとしました。遊郭の新吉原が隅田川畔の日本堤に開設されました。円空はといえば、明暦の大火灾の年は、二十六歳の壯年です。それで、この広義の元禄という時代にかれはどつぶりとつかつてゐるわけです。もちろん、江戸ではこの時点から急ピッチで新しい都市建設がすすみます。上方では商業資本の興隆がとみにめざましく、商人の実力がますます増大し、封建体制下ながら自由の氣風も漲ります。大坂・京都の遊里は「新町の夕暮島原の曙」とたたえられる華を咲かせます。西鶴の文学は『好色一代男』『好色一代女』から『日本永代蔵』『世間胸算用』などによつて、時代の明暗をみごとに表現します。芭蕉の俳諧もその時、『虚栗』から『冬の日』『猿蓑』などを次々と刊行いたします。

ところで、この芭蕉の俳諧について、しばしば隠遁の文学

といわれます。しかし、はたして隠遁なのでしょうか。たしかにかれは、当時の商業の盛な巷のただ中での活動からは離れてはいますが、商人たちの富の力に支えながら、自分の俳諧を位置づけ磨いてゆくわけです。利休のわび、芭蕉の風雅に隠遁の精神を見る学者もおるようですが、時の最大の権力者秀吉にあれほど近づいていた利休とその芸術が何で隠遁でしょうか。今度の著作では、わたくしは「元禄時代の商業資本の大きな発展のうえにいわば寄生することによつて、その時代を飾る独自な花として、蕉風の俳諧ははじめて花開いたのである」と書きました。西鶴や芭蕉の文学とその精神と対比すると、円空の山岳宗教は、非常に違います。ほぼ同時代における両者のコントラストにわたくしは注目したいと思います。

II 日本近世思想史の研究から

1 西鶴の浮世草子から源内・江漢へ

本論に入ろうと思います。じつは、ヨーロッパの哲学史と現代哲学を専攻するわたくしが、新規に日本近世思想の歴史的な考察にとりくむにあたつて、いきなり西鶴から研究を始めたことにいたしました。もつとも、そのときはまだ、西鶴、とくに芭蕉にたいして円空を対置して観ようという着想は浮んでおりませんでした。江戸思想を把握するための突破

口としてわたくしは一気に、とくに当時の代表的な思想家ともいえない西鶴の浮世草子にぶつかつたのです——藤原惺窓や林羅山などの漢学から、しこしこと研究を始めるのではなしに。

それはどうしてか。西鶴といえば、まずもつて『好色一代男』『好色一代女』で知られています。しかし、遊郭、遊里というものにはわたくしはとても馴染みがありませんでした。旧制高校生から大学生の頃は侵略戦争の最只中でしたが、西洋の文学、ゲーテ、バルザック、ロマン・ロランとか、あるいはヘルダーリン、ノヴァーリス、リルケとか、また、ブーシキン、ゴーリキーとか、そういう文学にわたくしは親しんでおりました。当時、誰でしたか名前を忘れましたが、日本のある有名な作家が「(廓で)遊ばなきや、文学はものにならない」と書いているのを読んで、これはとんでもない、と反発を覚えました。ですから、西鶴のいまあげた代表作などには興味がなかつたのです(西鶴といえば、その頃遊里の文学しか念頭に浮んでいなかつたからです)。しかし、今回、研究をすすめるに当たりまして、江戸期を全体として歴史的につかむために、こう考えました。キリストン弾圧という、悲惨の極ともいえる血の裁きの後、この弾圧を踏台としタブーとして幕藩体制が安定的発展期に入りました。そして元禄時代の興隆がくる。武家政治のもとでのとくに上方商

業資本の興隆。この事態を捉えるために、西鶴という文学者、西鶴というイデオロギーを通して、商業資本の繁栄の実態、京都や大坂の遊郭の実況。それから、市民はまさか年がら年中遊んでばかりいるわけではない、それどころか、遊ぶひまもない、金もない連中も少くない、かれらの市民として働く姿、生活する姿をやはりしかとみどける必要があると思つたのです。それで、今回の著作の「序文」でも書きましてが、西鶴から下つて都の錦、錦文流、江島其磧を経て、静観房好阿の談義本を繙き、平賀源内に辿りつき、——源内といえばもう蘭学の誕生と結びついてゆく時代ですが——そこで、司馬江漢、小田野直武、杉田玄白、前野良沢、そしてはからずも、かの賀茂眞淵にも会うことができました。ほかでもない平賀源内が賀茂眞淵に入門するのですね。往時のかれらの知識欲の逞しさ、さまざまな分野の生きいきとした交流を思いました。そして、司馬江漢の論文をまず書きあげたのですが、それが、今回の著作に収められることになる最初の論文となつたわけです。東京大学の宮地正人先生が書いてくださつた心のこもつた詳しい書評（『赤旗』一九八七年八月二十五日）のなかに、「岩崎氏はこの研究を司馬江漢の思想分析から開始し、十八世紀後半の蘭学誕生の決定的重要性を自己確認する過程で近世思想史の構図を作りあげていった」とあります。正しくもわたくしの意図を探りだしてください

ました。

司馬江漢は、知見の幅がはなはだ広くて多才、封建制の枠のなかにありながら自由にものを考へることのできるひとでした。かれは蘭学に大いに関心をもち、オランダ語の勉強にとりかかりはするのですが、源内と同様にと申しましようか、おそらく、兩人ともこつこつと丹念にはげむというタイプのひとではない。江漢はオランダ語の出来る友人に銅版画の作り方を翻訳してもらつて、その訳で研究を重ね、自力でその技法の腕をみがき、ついに、隅田川の、下流からみて堤の東側にある三田神社——東京でお育ちの年輩の方は御存知でしようけれど——あの三田神社を画幅に収めて遙かに筑波山を望む風景画を、銅版画で最初に描きあげました。かれはまた太陽中心説すなわち「地転の説」にかんする書物を著わし、この説の普及にも大いに貢献しました。自由な発想に富むすぐれた隨筆集も遺しています。

2 日本近世思想史をいわば縦につらぬくもの

① 水戸学の思想

次に執筆したのは水戸学についてでした。水戸学を創始したのは徳川光圀ですが、『大日本史』の編纂に着手したのが、さきほど述べた振袖火事の年、翌月のことです——このことは偶然でしようけれども。ともあれ、光圀の事業は、島原の乱、由井正雪の乱もすでに終わり、幕藩体制がようやく展開

期にさしかかり、そのためしだいに、自國の歴史を顧みて現時点の意味をしつかりと捉えなおす必要が国内で自覺された。そうしたなかでの壮大な企てでした。その後水戸学では一時——つまり一七四〇年代末から約四十年間、中間に停滞の時期をはさみますが、後期の活動がやがて開始され、藤田幽谷や会沢正志斎の活躍などもありました。明治になつて廢藩置県ののち修史事業遂行の拠点が解体されたという困難を経て、その再開によつて一九〇六（明治三九）年、この大事業はついに完成しました。昭和の十五年戦争時には水戸学的な思想が皇国史観のなかにかなり浸透していたと思いま

す。

このように水戸学は近世思想史をいわば縦に通して、しかも明治、大正、昭和の戦争時にまで及ぶ思想へのかかわり、影響を大きくもつておりますので、わたくしには比較的に付きやすいものがありました。とくに水戸思想を誰から教わつたというわけではありませんが、わたくしの学んだ漢学のなかにそれはかなり色濃く入つていましたし、わたくし自身は皇国史観には頭から反対でしたが、水戸学は、とにかくいくらか知つている、見当が付くという点では馴染みがあつたわけです。それで水戸学について論稿を急いで書くということを通して、近世から近代まで全体を大づかみに展望する視点を、一つの側面から少しづつ形成することができまし

た。

② 近世絵画とその思想

わたくしは美学・芸術論に年来関心をもつてゐるので、水戸学思想の展開といわば平行に、時代・推移を縦にみるという仕方で、近世絵画の興隆・発展の過程とその思想を考えようという着想がまもなく浮びました。近世絵画の展開における外国からの影響には、ひとつには、主として長崎経由で中国の絵画と画論との積極的な導入と、もうひとつは、司馬江漢・亜欧堂田善、佐竹曙山、小田野直武、ついで、長崎派の川原慶賀らによる写実の技法の修得ということがあります。前者についていえば、漢学の素養のある人々が中国の古くかららの画論、その思想を導入するという重要な仕事をします。

まず、近世初期の狩野山樂とその長子永納による、自国の最初の総合的画史、『本朝画史』の成立を、画期的な事業とみなければなりません。このような画史、画論の成立は中国の影響ぬきに考えることはできないと思います。また、木下順庵門の祇園南海、護園派の服部南郭、さらに桑山玉洲、田能村竹山、渡辺華山らの画論が登場します。近世絵画の興隆・発展は、内的な醸酵のほかに、このような漢学、そして洋学の影響と切り離すことはできないと思います。このことを含めて近世絵画の興隆の課題が補論Iとなるわけです。

3 東アジアの孤島日本から海外への視野の拡大

次に、この著作の背景をなす大きなモチーフとして、孤島日本から東アジア（東北、東南アジアを含めて）とヨーロッパへの視点の拡大をめぐる問題があります。

① キリストンとその弾圧

戦国時代の終わり、幕藩体制の初めの頃、日本人は海外、遠くヨーロッパにまで眼を向けるようになつていきました。ヨーロッパの船が次々と訪れました。キリストンも入ってきました。日本の商人も海外に雄飛しました。天正十（一五八二）年には少年使節がローマ法皇のもとに派遣されました。伊達政宗はまた、慶長一八（一六一三）年、支倉常長の一行を、大西洋と太平洋を経由して、遠くローマ法皇とイスパニア国王のもとに送りました。これは二つの大洋を横切つてローマにまで赴く壯挙でありました。しかし、キリストンは徹底的に弾圧されました。なんと多くの信者たちを、およそ人を殺すというこの悪知恵を働かせるかぎりでの酷い殺し方で殺したことでしょう。宣教師ばかりでなく、おびただしい司教を、です。ですから、キリストン問題をこのように力づくで解決したあとに訪れた幕藩体制の安定期、までもつてあの元禄の繁栄というものを、わたくしたちは手放して喜ぶわけにはいかないと思うのです。このことを決して忘れることはできないのです。

② 「鎖国」のもとでの白石による視野の拡大

それで、日本の近世という時代をヨーロッパとの関係でみると、それは(1)キリストンの到来とその弾圧→(2)いわゆる「鎖国」→(3)（やがて蘭学の誕生を経て）「開国」という過程になります。そして、この中間(2)の時期に、とくに新井白石の登場があり、囚われた宣教師シドッチとの問対などをとおして、かれの海外への視野は大きく開けます。当時他にも海外への視野を開いた者もおりましたけれども、その学的素養の豊かさと識見の深さにおいて白石はやはり抜群であったといえましょう。大槻玄沢も白石を蘭学の草創者と讃えています。また、後世多くの人々に読まれた『采覽異言』について伊豆公夫は「洋学台頭の曙光はこの著によつて示された」と書いています。白石はしかしながら蘭語を自分で読むことはしませんでした。

③ 幕末の開国

そして、開国——すなわち、かのペリーの来日、ハリスの着任を経て、日米通商条約の調印がおこなわれます。それに先立つて、一八四〇（天保十一）年には、清国内でアヘン戦争が勃発し、日本の幕藩体制とその「鎖国」改策は未曾有の激震に見舞われ、急速な崩壊を余儀なくされるにいたりました。

近世幕藩体制の思想を、いわゆる「鎖国」時代においてさえも、世界との連関を含めて考えなければならぬと思いま

す。

4 キリスト教をめぐつて

① 禅僧と宣教師との「山口の討論」

したがつて、キリスト教問題は日本近世史を捉える大きな前提であり、しかもそれどころか、その初期における不可欠な本質的部分をなすとわたくしは考えます。それゆえ、日本近世思想史の最初の章としてまずもつて詳しく取扱われるべきであります。拙著では、第一章「幕藩体制形成期におけるキリスト教をめぐる思想的激動」と題して考察いたしました。

ここで重要なのは「山口の討論」です。山口で布教を始めたフランシスコ・ザヴィエルが豊後の大友義鎮からの招

きでその地を去つた後、キリスト教宣教師と、禅宗らとの宗教論争として有名な「山口の討論」がおこなわれました。たくさんの中僧侶や俗人が連日朝から晩までつめかけて論争をいどんだのです。宣教師側は教父トルレスと修道士フェルナンデスとの二人でした。折しも大内義隆にたいする陶晴賢の反乱がおこり、物情騒然となるなかでした。デウスとはいかなる者であるか。デウスはどこにいるか、なぜデウスはみえないのか。人間の魂には始めがあるのに終わりがない（不滅）のはなぜか。魂はいつたい何からできているか、デウスは、慈みぶかいならば、なぜ悪を欲する人間をわざわざ作った

か、またなぜいまごろになつてその教えが日本に届いたか（慈みぶかいなら、もつと早く来てもよかりそうなものなのに）、などの質問です。これらの質問はなかなかきびしい。

当時の禅僧たちの思考力が論理的にもなかなかすぐれていることを、わたくしは思うのです。宣教師たちもたじたじとなりまして、日本から遠くかれらの上級の機関に手紙を書いています。トマス・アクィナスやドゥンス・スコトウス——これは十三世紀の有名な哲学者ですが——を連れてきても、容易にうちかつことは難しいだろう、どうか今後日本には、論争に長じた人たちを送つてくれるよう、と書くのです。とにかく『山口の討論』は、面白いし、歴史的に重要なものです。

② ギリシア・ローマ以来の西欧思想の到来

当時、イエズス会宣教師の発意で印刷機が導入され、日本文の出版物も出ました。ルイス・デ・グラナダの白眉の書といわれる信仰書の抄訳や、トマス・ア・ケンピスの書として今日も愛読される『キリストのまねび』の抄訳などが日本語版として刊行されています。当時のキリスト教のなかには、こうした海外の名著に親しむ者もいたのです。

当時日本語で書かれたキリスト教の文献をみると、ディオニュシウス・アレオパギタとか、アウグスティヌスとか、トマス・アクイナスとか、いろいろの哲学者・神学者たちの名

前が出てきます。一、二世紀の頃のテルトウリアヌスの名前も皆さん聞いたことがおありになると思いますが、「不合理なるがゆえに、われこれを信ず（credo ut absurdum est）」といった人です。キリスト教は不合理だが、それゆえにこれを信ずるのだ、というわけですが、かれの名前も出てきます。「丸血留の道」という一文——丸血留とは殉教者という意味ですが——、そのなかに「殉教者の血は新しいキリスト信者の種子である」というテルトウリアヌスの言葉が引用されています。

このように、幕藩体制の形成期には、ヨーロッパの思想、いやむろん東方へブライから始まりますが、ギリシア・ローマ期の思想、とくに神学者たちの思想、民衆の宗教思想、哲学思想が日本に紹介されていました。とくにキリスト教の神学体系では神の存在証明を重視しますが、それには、宇宙論、アリストテレス¹、プラトニア²の宇宙論が基礎として援用されます。これは天動説でありまして、ガリレオが『天文対話』で詳述する、もちろん批判としてですが、この古い天文学説が、神の存在証明のために、キリスト教の教理書では、力を入れて説かれていました。また、人間論としては、アリストテレスの『デ・アニマ』（魂論）、それにトマス・アクィナスの施した注釈が、主として説かれました。これがイエズス会のアリストテレス的³な人間観として、日本に伝えられました。

5 封建的な刑罰制度について

キリスト弾圧のことにつれましたので、そのこととの関連で近世における刑罰の問題に言及しておきます。新井白石にもかかわります。

戦国時代、秀吉のもとできびしい処罰がおこなわれました。堺の茶人山上宗二が秀吉の瘤に触れて、耳と鼻をそがれて惨殺された話は有名ですね。朝鮮戦争時における彼地での惨虐さは言語に絶するものでした。また、キリスト弾圧の狂暴さも目を蔽いたくなるほどのものです。新井白石が『読史余論』の終わりの方で書いていますが、徳川の時代、重罪の者を、切腹させたり、斬り殺したり、磔にしたり、火あぶりにする——火あぶりも、キリスト弾圧のときなど、できるだけ緩^ゆる火でゆっくりと殺すわけです、じつに酷い殺し方です。白石は、刑は重すぎると、その検討を提言しております。

この連関で、渡辺華山について一言したいです。「鎖国」中でもオランダとの貿易が認められていたことは周知のことですが、オランダの商館長ニーマンが東京にやつてきたときには、かれは会うんです。そして、ニーマンから、ヨーロッパでは囚人のために良い医者を選んでいるという話を聞くのです。なぜか。ニーマンはいいます。牢獄は公的な施設だか

ら、正義に背かぬように注意をしている、良い医者を選ばないと、罪人は死ななくてよいのに、死なせることになるからだ、と申します。華山自身ものちに牢屋に入れられます。実際の体験をして、いかに牢屋のなかが非道酷薄であるかをかれは書きしるしています。華山よりか何十年か前に生まれた山片蟠桃は他の点ではすぐれた思想家だと思うのですが、かれはしかし、白石の『読史余論』から百年ほど経て成った『夢の代』のなかで、重罪のものは、牢獄のなかで、足させ手かせをし、歯を抜くなど、苦しませておくがよい、君や父を殺害した罪人は、磔にすればひと思いだが、竹鋸で首を三日も四日も日々に疵付け^(きず)、あるいは逆さ吊りにして二三日も棄てておけば懲しめとなろう、と書いています。蟠桃のよう考へている人も当時かなりいたのでしよう。もつとも、坂本弁護士一家の殺害事件をみれば、犯人にたいし胸の煮えくりかえる思いもおきてきましうね。さきのニューマンの話で思うのですが、イタリアのチエザーレ・ベッカリーアのことです。旧制高校のとき、敬虔なクリスチヤンの三谷隆正先生から教わったのですが、ベッカリーアはルソーの社会契約説の立場をとり、社会正義から刑法思想を開拓し、罪刑法定主義を主張しました。そして新興市民階級（もちろん当時としては貧民層を含めて）の立場から封建的な刑罰制度をきびしく批判しました。その他多くの人々の運動の結果、ヨーロ

ッパの刑罰と監獄は近代化に向かい、監獄の悲惨な状態は一新されてゆきました。華山は、ニーマンの話を聞き、彼我のあいだの人間の考え方、人間性についての考え方について、大きな落差のあることを痛感したにちがいありません。

6 学問にたいする態度・方法

アプローチの角度を変えて、学問にたいする態度とか方法などについて考えたいのですが、かなり先を急ぐことをお許しください。

① 疑う精神

まず、疑う精神の力説です。朱子学者は考へ方が硬直していたかというと、必ずしもそうではない。たとえば貝原益軒です。かれの最晩年の著作は『大疑録』といつて、朱子学者であつたかれが、長い間いだきつけ検討を重ねていた朱子学への疑問を述べ、その解決を、次に来る世代に託そと願うかのように、自分の生涯の学問の総決算として綴つたものです。かれはこう書いています。学をおさめる道は「疑ひを解き迷いを開くにあり。ここを以て、学は能く疑うを以て明となし、能く疑わざるを以て不明となす」。しかしながらもいいます。疑うのにも正邪がある。よく考えたうえで疑うのは正しい。みだりに疑うのはゆきすぎの穿鑿で、正しくない。このように学問をするにあたつて疑いをもつことの重要な性を述べたかれの文章は、根拠もなしにただいたずらに疑う

を事とすることへの警しめを含めて（こういう軽率・浅薄も困りものですが）、けだし名言といえると思います。そのように考える基礎には、人類文明は変化発展するものという視点がかれにあります。『大疑録』の初めの箇所で、所与の時代を固定的にとらえず、今後の発展を信ずるがゆえに、朱子学への疑問をここで率直に述べるという姿勢をとっています。

新井白石もまたいやしくも学問をする以上疑うことは欠かせないと考えていました。歴史についても、証拠がなく疑わしいことはあくまで疑わしいままにしておかなければならぬ。勝手な推量をしてはいけない、根なし事をいつてはいけない、と申します（最近、ずいぶん、日本の歴史について勝

手な文章を書いて売り物にするひとが増えているような気がします）。この態度があればこそ、歴史学者としてかれは偉大な仕事を果たしたのです。白石は、証拠のない疑わしいことについてはかりそめにも勝手なことを口に出してはいけないということを、日頃から師木下順庵から学んだと申しています。順庵門は当時江戸において幕府の林派の勢力をはるかに凌いでおり、たくさんのすぐれた儒者がかれのもとから輩出しました。

三浦梅園、安藤昌益、山片蟠桃ら、かれらはみな疑う精神を力説しています。梅園の場合についていえば、疑いの仕方は、スケールが大きいと申しましようか、天地自然、その一

切の事物・事象にかんして、考え方のうえでの一切の泥み、慣れ癖を排し、「何故に」ということを抜本的に問わねばならぬ、といつています。わたくしは今回の拙著のなかで、「現存の認識にまつわる泥み、習慣を排して、およそ学問的認識の誕生するそもそもの原点となる『何故に』の問い合わせるように全自然の総体に向けてだしたのは、わが国では梅園をもつて嚆矢とするのではなかろうか」と書きました。

安藤昌益は、孔孟はもちろん堯舜禹、さらに、伏羲・神皇・黄帝にいたるいつきの聖人、およそ不耕（働くかない）で貪食する一切の者を否定しています。

② 実証性・合理性

学問にたいする姿勢として、次の問題に移ります。それは、まず実証性という点です。また益軒にもどりましょう。かれは『大和本草』という書物を書きました。これは、本草学にとどまりますが、わが国における植物学の先駆として記念碑的な著作といわれています。後年、蘭学の名門宇田川家を継いだ宇田川榕菴は、シーボルトに学び、リンネの分類学を導入し、近代科学としての植物学を日本においてうちたてるのですが、それに先立つ先駆として益軒の『大和本草』は、博物学者としてのかれの実証性をよく示すものとして、当時におけるその意義は高く評価されています。益軒は、儒学的な教養の高い同時代のすぐれた本草学者たちと交を結

び、ともに植物を栽培し、実地に試し、実際上の検証もしています。実証性とあわせて、益軒の合理性ということも指摘しておきます。これは儒学自身のもつ合理性からきています。さきに、「山口の討論」における日本の禅僧たちの思考力、思考の合理性について指摘しましたが、儒学のもつ合理的思考も当時として相当なものであります。窮理、理を窮めるということ、それがやがて、陰陽五行説をもうちやぶつて、西欧における実験にもとづく近代科学を受用する道を開くことになることを、重視しなければならないと思います。先を急ぎます。

1 人間とその情念の尊重、人間の尊嚴、平等

元禄時代には、僧契沖にしても伊藤仁斎にしても、人間、人間の情念、情感を大いに重んずる思想が豊かに出ています。契沖の思想は、周知のとおり、賀茂眞淵の歌学を経て、本居宣長の『源氏物語』解釈、ものあわれの説にひきつがれます。近松の淨瑠璃のなかには、仁斎の人間の感情、情操、愛を大切にする思想、——かれは儒学の仁を愛といいますし、——そういう思想がもろに入っています。あるいはむしろ、元禄時代の民衆が、その生活のなかから、体制思想としての硬直したりゴリズムを拒んで、人間と愛、感情を大切にするようになつたという、時代的状況が基礎にあるといえます。

江戸時代には、人間の一度限りの生、これは尊いものだ、大切にしなければならない、つまり人間の尊嚴の考え方が出ています。それから、もともと天から考えれば、——この天は朱子学の「天」ではなく、大自然ということですが——人間に貴賤の別などないという思想が述べられています。

8 戦争反対、真の平和の思想

こうしたことと結びついで、戦争反対のきびしい思想があります。賀茂眞淵は『国意考』という著作のなかでこういつています。「戦国時代には世が大いに乱れて長年戦争をして殺しあつた。そのとき一人も殺さなかつたのは、今の庶民である。人を少し殺したものは今のが本侍である。もう少し多く殺した者は大名となつた。それ以上多く殺した者は、たいそう尊いお方（将軍様）におなりになつて、世は栄えていらっしゃる」。これはやがて寛政元年に出版されました。眞淵がこのように『国意考』のなかで書いていることは注目すべきだと思います。たくさん殺せば殺しだけ偉くなれる、威張れる。勲章もぴかぴかだ。そういう事実の指摘です。

この連関で、白石の友人、木下順庵の弟子である雨森芳洲が、秀吉のおこなつた朝鮮への出兵を、道理のない戦いであつたとはつきりいつています。芳洲についてもつと述べたいのですが省略させていただきたい。

それから安藤昌益には、真の平和の実現を、階級的抑圧一

般としての構造的な暴力の廃棄と結びつける、東洋における破天荒の思想があります。

さいごに安政の不平等条約についてですが、現在における日本のアメリカとの関係は、当時の条約の不平等どころの騒ぎではないということです。日米安保条約、とくに最近の新「ガイドライン」のもとで、日本はほとんど属国の状態です。植民地です。巷間でもアメリカの五十何番目かの州だといわれているほどの状態です。じつさい日本の国土をアメリカの軍隊はいわば泥靴で踏みにじっている状況ではないでしょか。戦後五十年以上も経つて何ということでしょう。土井たか子の協力してきた橋本政権は「傀儡政権」といつてもいいくらいだと、わたくしは思います。

III 円空仏と山岳信仰

① 円空とその遊行、民衆とのかかわり——芭蕉との対比——

そこで、いよいよ話を円空に移らせていただきます。円空は美濃の農家に生まれまして、やがて木地師になりました。もつとも、木地師の出身という説もあります。六歳のときに母を洪水で失うのですが、優しい母の面影が円空の心のなかにいつまでもあつて、彼の木彫りには、母を思わせるような優しい女性がしばしば現れてまいります。かれは宝文三（一

六六三）年に受戒をし、翌年加賀の白山で修業をかさね、その翌年に伊吹山の太平寺で苦行をいたします。その寺は三井園城寺の末寺で、十一面觀音を本尊としております。かれは自分で、伊吹山の平等岩の修驗者と称しています。北方に回国し、翌寛文六年津軽海峡を渡つて北海道にゆき、険しい岩壁を伝つて窟籠りなどをして修業をしたり、また道南ではアイヌの人々のために聖觀音の諸像を作るなど、和人とアイヌ人との宗教的和合の願いをこめたといわれます。当時、松前藩によるアイヌ人の支配は苛酷なものであり、かれの渡道した三年後にはシャクシャインの有名な決起がおこります。円空は寛文七年には下北半島に戻り、奥羽、関東の各国の山々を経、甲斐、諏訪から木曽路を通つて尾張に出で、美濃に帰りました。その後もかれは大和の大峰山をはじめさまざまな靈場で苦行を積み、美濃・飛彈を主たる活動の舞台として、広く各地に乞食行脚を重ねています。巡錫のさいには山男以外には山伏修驗者でなければ足を踏みいれないような山道や間道を通ることが多かつたでしょ。この久修練行の山伏修驗を芭蕉の風雅高逸の旅と比べると、距たりは非常に大きく、芭蕉のような生き方は、とても隠遁者とはいえないと思います。松島先生も、かれの隠遁はポーズではなかつたかといわれますが、わたしにもそのように思われるのです。

芭蕉は元禄繁栄の巷からひとまず身を退いて自分独自の俳

諧の世界を作りあげてゆきました。そのようにしてうまれたかれの抒情詩はみごとなものです。そして連句・歌仙のすばらしいものを仕上げました。このことを十分に認めながらも、元禄の富、繁栄がかれの生活を暖く包んでいるとわたくしは思うのです。自分の住む、俳人にふさわしい家、第一次、二次、三次の芭蕉庵も門人たちに作つてもらつています。奥州旅行に出掛けるさいには芭蕉庵を売つてゆく、そして旅の資金にするけれども、帰つてから働かなくともどこかに仮寓できる当てがちゃんとあり、じつさい江戸に戻つてしばらく日本橋の繁栄の地に寓居したあと、また芭蕉庵を静かなところに新築してもらっています。芭蕉が旅先きで赴くところ、各地で迎える門弟、俳人、知人がおり、そこで楽しい歌仙が巻かれ、賑やかな宴が催される。故郷上野でも、また旅先きの土地にあつても、このように俳諧の連衆として、豪家、豪商、庄屋、名主、本陣の主人、藩士、医者、僧侶など、さまざまの余裕のある階層の人々の姿がかれの周囲にはみられるのです。別に悪いことではありません。ただ、しきりに芭蕉を隠者だ、世捨てだといふ人がいるから、このことを申すだけです。

円空の遍歴、かれが遊行し、乞食行脚をしていた話から、

そのことと芭蕉の高逸の旅との対比に話が移りましたが、円空のその後の修業について、ひきつづいてごく簡単に述べま

すと、寛文十一年に法隆寺で法相宗の血脉を受け、貞享一年には尾張の荒子観音寺で天台円頓戒を受け、元禄二年に寺門派の根本經典である「授決集最密」の印信口訣を受けております。入定は元禄八年です。

円空は学僧ではなく山伏であり、民衆のなかにはいって、雨乞いをしたり、医療その他生活上の相談相手になり、かれらの悲しみを慰め、木彫りの像を刻むのです。とてもとても金ぴかな仏像など持めないような貧しい農民たちに、枯木であれ朽木であれ余り木であれ、流木であれ、そこに仏の姿を刻んでかれは手渡しました。

② 円空の宗教思想の進展と作仏

そこで次に円空仏の基礎にある信仰、宗教思想というものを考えたいと思います。良いスライドが手許にあって円空仏をスクリーンに映しだすといいのですけれども、その準備がなくて申しわけありません。以下で述べることは、五来重、棚橋晃一の両氏の研究に恩恵を蒙っております。

* 五来重『円空仏——境涯と作品——』談交新社、同『野生の芸術・円空展』朝日新聞社、棚橋晃一『円空の芸術』東海大学出版社。

(3) 白山と伊吹山での修業の頃から

円空は修驗者として台密思想を各地土着の民間信仰と結びつけています。さきほど、円空が加賀の白山、ついで伊吹山

で修業したと申しました。伊吹山の太平寺は十一面觀音を本尊としております。この頃から民間信仰と習合する曼荼羅的な多神教世界がかれにありました、——もちろん大日如来とその教令輪身として破邪折伏する不動明王を深く崇めていたのは当然でありますけれども、白山の三尊の形式は、十一面

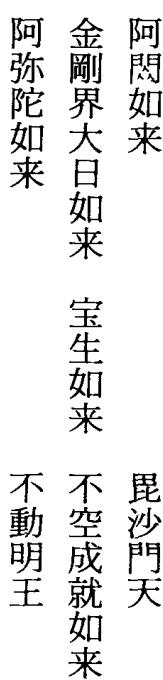
觀音を中心として、阿弥陀如来と聖觀音とを両脇においております。円空が白山ではじめて刻んだのは阿弥陀如来といわれています。この白山三尊の信仰は円空のその後の造像の重要なモチーフをなしているといえるでしょう。とくに十一面觀音を、生涯を通してたくさん作つております。聖觀音についても、北海道に渡つたさいには、宋画にちなんだ白衣觀音や、海難にあつた漁夫の鎮魂のための、五來重さんの名づけるところによれば「来迎觀音」などの像をたくさん刻みました。

(2) 法隆寺への研学を経て

さきほど、寛文十一年、円空が法隆寺で法相宗の血脉を受けたと申しましたが、かれはそのさい、どの程度、学に励んだかは分かりませんが、法相宗の教學を学び、棚橋さんの研究によりますと、その研学を通して、密教曼荼羅の多神教的な世界が新たに能動的に脳裏に鮮やかに形をとつて現れてきたと思われます。棚橋さんは、木に刻んだ仏像の、縦にさつと切りおろした裏面に墨書きしたサンスクリットの文字に着目

します。諸尊を象徴するサンスクリット文字を種子と呼ぶことは、皆さま御存知のとおりですが、伊吹山瑞巖寺所蔵の聖觀音像の背面に書かれた種子に、左記のような諸仮の配置を読み取ります。

次図のような諸仮の配置を示している



この図で、上部に聖觀音とありますが、これは、当の彫像を指しています。そして、金剛界大日如來を中心とし、その左右の阿閌如來、阿弥陀如來、また下方の宝生如來、不空成就如來の五如來は、いわゆる金剛界の五仏をなし、密教的宇宙像の中心をなす存在です。毘沙門天は四天王のなかでも最も由緒正しい神といわれておりますし、不動明王は、一切の罪障をうちやぶる破邪の護法神であります。たしかに以前の白山信仰の場合にも、もちろん寺門派の修驗者としてのかれにとつて、大日如來は根本にあつたし、不動明王ももちろん

念頭にいつもあつたけれども、このようなはつきりした形で作仏の構造をかれが考えるようになつてきていることを、棚橋さんは指摘しておられます。「円空の仏教理解が、白山信仰という特殊な地方的な信仰体系への傾斜から、密教全体の総合的理解へとひろがつたことを示している」といわれます。じつさい、円空は、日光、月光、十二神将、大黒天、牛頭天王、毘沙門天などの諸像をその後ますます刻むようになります。それ以前には、地蔵菩薩、牛頭天王などの諸像を作らなかつたかどうか、いや五来さんの円空年譜などによれば作つたようであり、円空は、すでに白山信仰とともに、かれ自身の宗教的的前提としての密教的世界を当然にももつており、そのうえで種々作仏したのでしょうかけれども、大づかみにとらえた場合、かれの作像の幅がほぼこの頃から飛躍的にぐつと拡がつたこと、深まつたこと、そして質的に多様化、多彩になつたこと、しかも力動的な作風をいつそう示すようになったことは確かであり、いまや密教的多神教の包摶する広大な世界が、そしてその世界に座する諸仏、諸神、諸天の姿が、一つひとつ、生きいきとした思想内容をもつて具体的にかれに創造を迫つてきたのでしよう。円空は、自信をもつて、鉈と鑿を手に、この新しい対象領域で、天衣無縫、ますます自由で迫力に富む力強い諸像を作りあげてゆきました。

棚橋さんはさらにすすんで、円空によつて、やがて、彫像の背面の最上部に「最勝」の意味をもつサンスクリットの文字がしるされ、その下に、大日如来の三身、すなわち、法身、報身、應神への祈禱を表す呪文がやはりサンスクリットで書かれるようになつたことに着目しています。ここには、密教の真如と、救濟のためのその顯現としての活動との完全な統一という光輝にみちた円かな慈悲そのものの弁証法が示されている、といつてもよいであります。棚橋さんはさらに、円空が、毘沙門天・不動明王といった守護神をあらわすサンスクリット文字を、その後もしばしば、下方の左右に書いていることも指摘しております。こうして、さきに掲げた図の、聖観音像の背面の下方に墨書きされていた仏法を護る二善神がそのままここでもしるされております。同じ背面におけるいわゆる金剛界五仏と二善神とを、ここであらためて法（ダルマ）とその多様な働きとの統一として、大いなる叡智と慈悲との永遠の顯現として、そして、この法が善神によつて永遠に護られているとして、円空がとらえかえしている、ということができるのではないでしようか。

もしほぼこのように円空の密教思想が深まつていつたと想定しうるとすれば、そこには、かれの修驗者としてのきびしい苦行と、村里での民衆との宗教的な接触、とくに民衆の切なる思いをみずからに体して心をこめてかれらのために作仏

するという実践とが、どこまでも基本にあつたのです。そして、自分の信仰を深めるための、法隆寺での真摯な教理の研修がありました。このようにして、かれの人間性と宗教思想とがますますきたえられ、作品のなかにきびしさとやさしさとが二つながらにますます備わってゆきました。一言でいえば、民衆の平和な生活と日々の尊い労働とにあくまで密着した作仏であつたであろう、と思うのであります。

③ 結び——悠久のダルマと人間の生——

わたくしは最後に、本論の結びとして、本書上下二巻の結びに書きましたことにたち帰させていただきたく存じます。西鶴も芭蕉も、文学として秀れていますけれども、円空の彫像には非常に打たれるものがあります。わたくしはとてもども山岳を歩くことなどできませんけれども、遊行僧円空の姿は想像するだけでもやはり素晴らしいと思います。次に引用させていただきます。

「このようにして、円空の活動は、たしかに、幕藩体制が確立し、元禄（広義）の経済的・文化的な高揚を迎える時期におこなわれた。しかし、かれは、時めく上層商人の活動する、生産物商品の流通の賑わしいエネルギーッシュな舞台とも、またそれと不可分な花魁の薰香と、音曲の伴奏に華やぐ紅灯の巷とも、まったく無縁であった。かれはまた、古典的教養の高い風狂高逸の歌仙の座に就き、あるいは豪商の一
夜（ひとよ）

の俳諧の宴に招かれて、主賓となることもたえてなかつた」。これが、西鶴や芭蕉との決定的な違いだと思います。「かれが笈を負い錫杖を手に勇躍して赴くのは、白雲をいただく山岳であり、海浜にそそりたつ断崖であり、滝行や冬の日の凍てつく窟でのきびしい修業であつた。人里を遠く離れた山顛にひとり立ち、ふと杖を留めて見渡せば、高く羊雲よううんのかかる蒼穹があり、遙かに落日に赤々と燃える連峰があり、果てしなく広がる紺碧の波濤があつた。——そこでの苦行のなかにこそ、役行者、空海ら、有名無名の先人たちによつて開かれ受けつがれてきた、日本古来の山岳宗教の伝統があり、かれ円空が体得したと信じたものは、この伝統的な山伏修験によって育まれてきた醇乎として悠久不拔のダルマ（dharma）の精神であつた。それは、かの紅欄の遊里に憧れ、遊女とたわむれる俗塵を遙かに遠離し、山里や海浜に汙水流して働く庶民の、素朴で底力のある生活とつねに共感しあい一体となることができる、かれ自身の生の迸る活力の源泉であつた。」これで、今日の話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（付記） 当日のテープに加筆して成ったのが本編である。
(一橋大学名譽教授)